

第6章 結語

本論文の最終章では、本論文のまとめや今後の研究の課題を、結語としてまとめる。

本論文『ラトヴィア語の動詞接頭辞付加 — 空間・時間・感情を表示する言語活動 —』では、動詞接頭辞付加が空間的意味、アスペクト的意味、話者の主観的評価を示し、話者の関与が大きい言語活動であることを、多くの言語資料を用い、規範主義の言語文化論の批判に照らして記述した。本論文で取り上げた言語文化論が批判する現象は、主に借用語の動詞の PFV 化、そして縮減のアスペクトの pa-動詞の使用である。

第1章では、動詞接頭辞を先行研究に基づき概略した。

第2章では、対立アスペクトを中心としたアスペクトを論じた。PFV・IPFVの意味対立や対立アスペクトの相対性を示し、言語文化論で批判される借用語の動詞の PFV 化を再解釈するための土台を得た。

第3章では、語形成への話者の関与が大きく活動的性格が強い借用語の動詞への接頭辞付加を、借用語の PFV 化を中心に記述した。借用語の動詞の相対的な PFV 化とそれによる基動詞の相対的な IPFV 化という再解釈は、この現象を言語の実態により即して捉えることを可能にした。付加率が高い接頭辞 no-は他の接頭辞と比較して、空間的意味や基動詞との語彙的関連性が希薄なまま、広い語彙的意味の基動詞を PFV 化することに特化した接頭辞である。このほかに借用語の動詞の接頭辞付加の最新の数的動向を示したほか、借用語の接頭辞付加のメカニズムである類推や、接頭辞クリップの現象を記述した。

第4章では、名詞の指小形と“少し”の動作を示す pa-動詞を相関させることで、個別的なアスペクトと話者の主観的評価が結びついていることを示した。縮減アスペクトを元に動作やそれに広く関連する事象に対する話者の主観的評価を表示する pa-動詞を、テキストの性格や文脈を最大限に考慮して記述した。

第5章では、話された言葉も含むコミュニケーションにおける接頭辞の機能を広く論じた。接頭辞動詞に関わる言い直しでは、話者がアスペクト的意味や空間的意味を表示するかしないか、表示をするならばどのアスペクト的意味や空間的意味を表示するか、または変化させるのか、といった接頭辞の選択の過程が見え、接頭辞付加の活動的性格が示される。

接頭辞は空間やアスペクトはもちろんのこと、主観的評価といった話者の感情を示すことがあり、これらを表示する動詞接頭辞付加は、話者主体の性格が強い言語活動である。

勿論、本論文では扱うことができず、今後のさらなる研究が望まれる問題も少なくない。以下にいくつかの問題を挙げる。

アスペクト対立

本論文では、アスペクト対立の相対性を元に借用語の動詞の PFV 化の解釈を試みた。しかし言語文化論において基動詞の PFV 化が支持されず、校閲において PFV 化の接頭辞が削除されてしまうのは、アスペクト対立が中和されやすく、その意味対立も相対的であるからだけでなく、他の理由も考えられる。

主観的評価を示す指小形や一部の縮減アスペクトの *pa*-動詞はテキストの校閲で削除されるが、“なくてもいい”とされたり“あるべきではない”とされるのは、主観的側面の表出が命題にはあまり影響せず、主観的側面を表示する場面に制限があるからであった。これを動詞の PFV 化に関連づけると、基動詞の PFV 化には、動作を PFV と見る話者のアスペクト的な視点を表示するだけでなく、動作が完了したという話者の個人的感覚を表示したり、事態を出来事化することで叙述をより個人的に行う側面が強いのではないか、と思われる。

こういった側面の実証的な試みは難しいと思われるが、校閲で PFV 化の接頭辞 *no*-が削除され、PFV 化された接頭辞動詞が口語でよく用いられることは、この仮説の土台となりうる事実である。文の命題を変えない範囲で言語形式を整えるのがテキストの校閲の役割であるとすれば、そこで削除される PFV 化の接頭辞は文の命題を大きく変えていないことになる。また、叙述を個人的に行うことが社会的に最も許されているのは口語である。

この新たな仮説の検証のためには、本論文の 4.3.2. で引用した Vajda の「陳述的に有標な動詞」(Vajda 1987, 64) という理論の深化や、アスペクト論で PFV の動詞の特徴とされる「出来事性」の概念の導入、アスペクトと叙述、アスペクトと認知の関係などを考慮に入れる必要があるだろう。

接頭辞付加による PFV 化を中心とした議論をしていると、PFV が形態的に有標であり IPFV が無標であるという印象が生まれる。これに関連して Hauzenberga-Šturma は、無アスペクトの接頭辞動詞の接頭辞を取り IPFV の動詞として使用することを逆行的な (retrograde) 形成としている (Hauzenberga-Šturma 1979, 296-297)。このプロセスは、PFV の動作を示すための接頭辞付加とは正反対の、IPFV の動作を示すために行われる脱接頭辞付加である。本論文では接頭辞付加や接頭辞動詞を研究の対象としていたため、必然的に PFV の動詞の使用を分析対象とし、接頭辞が付加されることで生まれる意味変化や接頭辞の機能が中心的関心であった。今後はこのような逆行的な IPFV 化の研究が、接頭辞が関わるラトヴィア語のアスペクトをより深く理解するために必要になる。

本論文では、空間的意味の接頭辞に対応する副詞の使用を詳しく扱わなかった。基動詞と共に IPFV の分析的表現で用いられる空間的意味の副詞は口語においてよく見られ、表現的であるという考察が先行研究でなされている (Staltmane 1958c, 24, Hauzenberga-Šturma 1979, 301-302)。このことから今後は文体を考慮に入れたアスペクト研究が必要であろう。

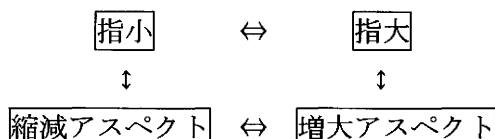
アスペクトと時制は多くの言語で互いに関わっているが、その関係について本論文では、ラトヴィア語では 2 つの概念は互いに独立していると述べ (本論文 2.7.)、言語文化論が借

用語の PFV の動詞に対して複合時制の語形を推奨案としつつも具体的な用例を挙げず、置き換えができるかは疑問が残るということを指摘するにとどめた (本論文 3.5.2.)。アスペクトによる PFV と時制によるパーフェクトが重なり合う点、重なり合わない点をより詳細に研究する必要がある。

個別的アスペクトと主観的評価のつながり

「小ささ」があれば「大きさ」があるのはごく自然なことである。「ものの小ささ」を示す名詞の指小形と並行して、「ものの大きさ」を示す名詞の指大形を持つ言語がある。例えばロシア語には名詞 *dom* 「家」の指大形 *domišče* や *domina* がある。指大形は軽蔑的なニュアンスを持つことが多く、指小形と同じように話者の主観的評価を示す。小ささや弱さに対する大きさや強さといった高い集中性はある種の「強調」や「誇張」表現でもあり、表現性と結びつくことが知られている (Luk'janova 1986, 55)。よって感情的側面と表現的側面においても、指小形と指大形は相関している。

第4章で扱った“動作の小ささ”を示す縮減アスペクトと対極の関係にあるのが、“動作の大きさ”を示す増大アスペクトである。ラトヴィア語では接頭辞 *sa-* がその表示に主に参与する。よって指小と指大、縮減アスペクトと増大アスペクトは互いに相関関係を成す。



ラトヴィア語には指大形が存在しないため、指大形と増大アスペクトを示す接頭辞動詞を相関させることはできないが、増大アスペクトを示す動詞にも何らかの主観的側面が捉えられる可能性は十分にある。

接頭辞 *pa-* と同じく縮減アスペクトや動作の突然性を示す接頭辞 *uz-* や、形式的に義務感で動作を遂行する意味を持つことがある接頭辞 *at-* といった個別の接頭辞の研究も、アスペクト論や語形成論が扱ってこなかったアスペクトと主観的評価の関わりをより深く探るために役立つだろう。

pa- 動詞に関する今後の研究の課題も残る。例えば Nieuwenhuis は反復アスペクトを示す動詞を動詞の指小形として挙げていたが (Nieuwenhuis 1985, 70-73)、*pa-* 動詞は *šo to* 「あれもこれも」や *šad tad* 「時々」といった反復の意味と結びつきやすい語を伴うことが多いことは本論文では詳しく触れなかった。よって縮減アスペクトだけでなく、*pa-* 動詞に関しては、反復アスペクトと主観的評価の関わりも検討しなければいけない。また反復のアスペクトは接尾辞によっても示されるため、広く接辞付加を記述することでアスペクトと主観的評価のつながりの研究の広がりが期待される。

数量データの解釈 — 借用語の基動詞と接頭辞動詞の用例数の差

本研究では、『新聞図書館』における借用語の基動詞と接頭辞動詞の件数の比較は行わなかった。語形成関係では基動詞が一次的、接頭辞動詞はそこから派生をした二次的な語である。しかし接頭辞動詞の使用が基動詞よりも圧倒的に多い動詞がある (balansēt「バランスを取る」(5093)と sabalansēt「バランスを取る」(19919)、ģipsēt「ギプスをはめる」(37)と iegipsēt「ギプスをはめる」(666)など)。

このような基動詞と接頭辞動詞を、使用数が不均衡なアスペクト対立とみなすのか、なぜ接頭辞動詞の使用が基動詞よりも一般的なのかを、アスペクト論だけでなく語形成論や語彙論から考察する必要がある。

話された言葉のさらなる研究

本論文では言い直しを広く理解したが、その言い直しの定義にはさらなる検討が必要である。他言語を素材とした話された言葉の研究結果も参照し、今後も用例収集と検討が必要である。

類義要素の追加は、個人的な話し方や書き方の特徴の可能性もある。例えば例文 5-136 と例文 5-137、例文 5-139 と例文 5-140 はそれぞれ同じ書き手によるものであり、5.2.4.2.で挙げた例文 5-66 の話者は、別の回の番組の出演時でも全く同じ類義要素の追加 (ierasts「いつもの」と pierasts「慣れた」) を行っている。類義要素の追加はどの話者も行う行為だが、それが話者や言語の使用場面に関係があるのかを考察することも興味深いだろう。

以上のような課題が残されたものの、本論文の研究結果が今後のラトヴィア語学のアスペクト論、語形成論、語彙論、言語における主観的側面と客観的側面の研究、話された言葉の研究に少しでも貢献できれば、これ以上の喜びはない。

また、日本におけるラトヴィア語学習は始まったばかりである。ラトヴィア語学習の壁となる動詞接頭辞の習得には、空間的意味はもちろんのこと、対立アスペクトや個別的なアスペクトの意味を理解することが重要である。特に、スラヴ諸語のようにアスペクト対立を文法カテゴリーとして導入しにくいラトヴィア語のアスペクト対立には、動詞接頭辞が大きく関わっている。さらに、動詞接頭辞の知識は、学習者の語彙を格段に増やす上でも欠かせない。本論文で得られたアスペクト論と語形成論の接頭辞研究の新たな知見が、日本人ラトヴィア語学習者に還元されていけば幸いである。